

廣津和郎全集

十二卷

広津和郎全集 第二卷

定価四二〇〇円

昭和四十九年六月一日印刷
昭和四十九年六月十日発行

著者 広津和郎

発行者 高梨 茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

広津和郎全集 第二卷

目次

月光の下で

盗心

首

車掌の復讐

競争者

狗が疲れている

さまよえる琉球人

秋の一夜

黄昏

九

一九

四四

四四

四四

五五

五五

五五

一九

世は事もなし

一五

哀れな女

一五

別離

二三

探海燈の下を

一四

昭和初年のインテリ作家

一六

手に霜焼のした女

一六

父の死

二〇

白壁のある風景

二五

頬打ち

二三

過去

二五

訓練されたる人情

二六

或エンゼルの死

二四

一時期

三〇

心臓の問題

三六

巷の歴史

三六

流るる時代

三九

歴史と歴史との間

四三

あとがき

小説 二

月光の下で

一

「あら！」

そっと溜息を吐いて、それから失望したように、併し半分はおかしそうに、

「あら！ 寝ていらっしやるのね」

うつらうつらとしながら、要吉はそれを聞いていた。彼女だな、少し迷惑も感じて、だが、眼を醒まさなくてはなるまい、と云う事を鈍い感じで、思ったか思わないうちに、彼は却って一層深い眠りに陥って行ったものらしい。

で、彼は、直ぐ夢だ、だから死んでもかまわないと思ったのだ。なぜなら、彼は今彼女と一緒に死のうとしているので、そしてそのために清々と泣いていたのだから。なぜ死ぬのが

そのように悲しいことなのか？ そんなことではない。ただ、彼の頭は、死は悲しいと、いや、死ぬる事の悲しさを頭からは認めて泣いたのに違いなかった。心中の相手の彼女がいとおしくて、可愛くて、とても堪らなくて、彼は眼が醒めた。机の上に顔を当てたまま、彼は午睡していたのだ。

「いつ来たの？」

光線を眩しく感じて、眼をしばしばさせながら、要吉は云った。

「もうザッと先刻よ。先刻から此処に坐って待つてたんですわ。ずい分よくお眠っていらっしやったのね」

机の前に開け放されている窓から、要吉は少し荒れた庭を眺めた。彼女の視線を避けるためだった。そして彼は、自分の眼の玉が若し裏側に廻転するものだったら、ぐるりと廻転させて、未だこの上出て来る涙があるかないかを、見究めた程だった。そんな風に、夢の中で泣いていた事が恥しかった。だが、不思議なことに、夢であれ程泣いたのに、別に濡れているようでもなかった。そこで安心して彼女の方へ顔を向けた。

彼女——よし子はにっこりした。

「いやな要吉さん、どうして、そんなにあたしを見詰めるの？……顔に何か喰っ付いていて？」

併し要吉はいつまでも彼女の顔を見詰めていたかった。今、

あなたと心中しかけた夢を見て泣いていたんですよ、よし子さん——こんな風に云ってしまいたかった。けれども、云ってしまったら、もうお終いだ！彼の人生はとも面倒な事の中に迷い入ってしまうだろうから。彼はあんな夢を見て、こんなに急に、もう滅茶苦茶にこの女が懐しくなってしまう事が、ひどく忙しかった。彼はどうしてもこの女と恋してはならなかったのだ。それにはいろいろの事情がある。彼女が知らない事情がある。

一口に云うと、たった一ヶ月前に、要吉は或少女と婚約してしまつたのであつた。親の許しは得ていなかったけれども、自分の良心にはよく相談して見た上で……

東京にいるその少女の顔が、要吉の眼の前に浮いていた。

「ねえ、要吉さん、あたし、あなたにお願いがあるのよ。諾いて下さる？」

一寸顔を赧らめて、首を傾げるような恰好をしながら、よし子が云つた。

「お願い？……僕と結婚して呉れと云うの？」

自分でも思いがけない事を、併し全然大仰な冗談口調ではあつたが、要吉は云ってしまった。

「……」

よし子は一層赧くなった。その赧くなった顔は、直ぐ袂に蔽われてしまつたけれども、うすい浴衣を通して、身体中に

熱情の流れ過ぎる熱さが、要吉の眼に感じられた。——彼は少しづらくなつた。

が、直ぐ袂に押しあてた顔の、底知れぬ羞恥の深みから、よし子はククッと笑い出してしまつた。

「救われた！」

そんな氣が要吉はした。と同時に、何か残念のような、うらめしい氣持もして、過ぎ去り行く危機のうしろ姿を見送つた。此上ない幸福が逃げて行つたと云う氣がして。——内に安心を包んだ悔恨をしばらく弄ぶ不心得を、我とみずから叱りながら。

窓の外には、真夏の夕陽が斜めに木々の上に流れていた。

疲れたような濃緑の木の葉の反映が、二重の反映を窓のうちの机の上に滑らせていた。二人の額にはうす青い、併し顔の向けようでは窓との位置の関係から、うす黄ろく見える汗のしめりが浮いていた。

「冗談は兎も角として、そのお願いっていうのは一体どんな事？」

こう要吉は云つた。

「あのね」

よし子はやけにバタバタ団扇を使いながら、

「あたし、ポオトに乗って見たい……あなた、ポオトに伴れてつて下さらない？ お厭？」

「好いとも、又いつかね」

「あら、心細いわ、いつかなんて。いつと極めて下さらなけりや厭」

ひたと彼女の視線を額に感じて、要吉は当惑した。殆んど大きな旋風にもぶつつかったようであつた。この女とボオートに乗ったら、それこそ終いだ。それでなくとも、彼女からだんだん心に喰い込まれて行く魅力には、抵抗出来そうもなくなっている。——彼は東京にいる少女の事を再び思い浮べた。だが、こんな事で困つたような顔をして見せるのが、相手に悪いようにも考えられた。そこでとうとうその恐ろしい事を約束してしまつた。

「それじゃあ、今度月の好い晩が来たら、屹度^{きど}つれてって上げよう」

「ほんとう？」

尻上りの言葉で念を押すように云うと、ふと彼女は泣きそうな顔になって、長い膝の上につつましく眼を落した。要吉もへんに悲しくなつて来た。未だ先刻の心中の夢から離れられないのだろう。

二三日経った。

隣りの娘のよし子は、日に一二時間は要吉の母を屹度たずねて来て、その序でに要吉の書斎を見舞うのが常だつた。あれきりボオトの事は云い出さなかつた。その様子から見ると、もうそんな事はケロリと忘れてしまつてゐるようにも見えた。多分あれはあの時の一寸した気分から云つたものか、それとも他に云う事があるのを云えないで、隠しから云つたものであろう。それなのに、あの夢を見て以来の自分の心持はどうだ？　こう要吉は思つた。あの途方もない夢、よし子と心中しかけたあの夢が、要吉の心から少しも離れなかつた。その夢はただ偶然にあの時、彼の心に不図通り魔のように浮んだものとは思えなかつた。その糸を手繰れば、その源は随分遠くへ遠くへと溯つて行くように思われた。彼は子供の時の事までが思われて来た。子供の時、未だほんのねんねえだつたよし子、両手を一寸腋の下にかうような恰好をして、筒袖の着物を着て髪をおかっぱに結つていた頃のよし子、それから小学校に通つていた頃のよし子、そんなものが案外深く深く、遠い昔から自分の心に喰い入つていたような気がして来た。彼はそんな事を思い、又あの夢を思う度に、へんに感傷的な心持に迫り込まれた。——たしかに、彼は彼女を愛し始めたに違いない。

「よし子の親も悪いのだ。大事な娘を、たとい隣り同士だと

は云え、自分のような若い学生のいる家に、ひとりで自由に遊びに寄越すと云う法はない」

心の支配を失いかける時、要吉はこんな勝手な非難を彼女の親に向けて見たりした。

そして又ふと、こんな疑惑の胸に湧いて来る事もあった。

ひよっとしたら、自分の母と隣家の主婦——よし子の母との間には、何かの諒解が出来上っているのではないだろうか？よし子と自分との間を、見て見ぬ振りをして互の母親が、じつと窺っているのではないだろうか？

「好い気になっていらあ！」擦ったい気持がして、彼はそんな風な想像に耽る自分を嘲笑った。だが、考えて見ると、彼の母が彼のために、未来のお嫁さんを、頻りと老眼鏡の底から物色していると云う事は、確にあり得るに違いなかった。

——そして此夏、東京で、あの少女、自分の婚約した少女のいる東京で過ごそうと思っている自分を、無理に呼び戻した母の心持には、ただその息子を一夏自分のそばに引きつけたいと思っている親心以外の何かがなかったとは云えない気がする。……

要吉はいつの間にか幸福を感じて来た。東京で図書館通いをしたいと幾ら云っても、どうしても帰って来て呉れるようにと書いて来た母の手紙が、今よく読める気がした。

だが、そう思うと同時に、あの少女をどうする？ 東京に

残して来たあの少女を？ と云う考えが再び頭を擡げて来た。つい最近、ほんの一ヶ月前に、自分はその少女と婚約してしまつたばかりではないか？

自分は確にその少女を愛していた。どう考えてもその少女を愛していた。それなのに今よし子を愛している。——此浮気っぽい気紛れさを、何とも弁解のしようがなかった。

「——若し俺があの少女よりも、よし子を愛するようになってしまつたら、あの少女はどうするだろうな。——男と云うものが卑しむべき動物だと云う事をああいふ無垢な娘に感じさせるのは、考えて見ても堪らない！」

要吉はそういう虫の好い、併し彼にしては煩悶に違いない迷いの暗い気持に陥つて、その一日二日を送つた。意志の弱い彼は、それをどちらかに決心する事が出来なかった。道徳的に云えば、あの少女と約束をしながら、今それを棄てて、よし子に愛をうつすという事はゆるし得ない。と云つて、それならば、よし子の事をさらいと思ひ切つてしまおうとすれば、それが又態々自分に来た幸福を、自分から捨てるような気がする。と云つて、あの少女を捨てる事は尚出来ない……。

そんな風に苦しくなる時、一つの考えから一時的に忘却の中に逃避する事は、彼のような性格の男が扱ふ一つの手段だった。どつちかなるようになるだろう。時にまかせれば……そして彼は、日頃彼の嫌っている吉岡の訪問が、だんだん煩

さいものと思われなくなつて来た。

吉岡と云うのは、要吉とは中学の同期生だった。その家は代々此土地で金貸し業をやっていた。多分十年前か二十年先に、あの瘦せて因業な父親が死んだら、吉岡はその父祖のなりわいをそのままそっくり引継ぐに違いない。別段悪いとも思わなければ、細かに神経を働かせることもなく。——そのように彼は別に時代とか、此世の中と金とか、そう云つたような問題を一度も考えて見た事もないような、暢気な良心を持った青年だった。

その吉岡が此頃、何を思い出したか、毎日のようにしげしげ要吉をたずねて来るのであった。

「神経が細引見たように太い奴だ！」要吉は吉岡と話しているときよくそんな気がした。

東京に出て、専門の学校に行っている要吉と、田舎の小さな町で、何の刺激もなく暮している吉岡とでは、實際頭も趣味も有らゆるものが異っている事に不思議はなかった。それだから、始終その男がたずねて来る事が、最初の中要吉はうるさく厭わしかったが、併しそうした下らない話の中にも、此頃の忙しい恋愛問題が一時でも忘れていられる種が見つかる云う事が、何となく彼には好もしくなつて行つた。

ところが、或日、吉岡が突然、妙なことを切り出した。

「君、よし子さんね……」

そう云つて、何か云いたそうにしたが、吉岡はためらつてしまった。

「えッ？」

要吉はそう云つて、まじまじと吉岡の恥しそうな顔を見つめていたが、やがてその心持が直覺出来た気がした。

「此奴！」そう要吉は腹の中でむらむらとした。「こいつめ、俺のよし子を狙っているのか？ この低能が？」

が、直ぐへんに又可哀そうになつて来て、

「よし子さん？ よしさんがどうかしたのかい？」と優しく訊いた。

「僕、氣に入つた」

ひどく思い入つた風で、吉岡は嘆息しながら、懇願するような眼付で、じつと要吉の眼を見つめた。それがへんにおかしくもあり、又へんに哀れげでもあった。

三

翌日、要吉はよし子と対座している間に、昨日の吉岡の言葉や、吉岡がよし子を愛しているという事を自分に打明けた時の表情などが思い出されて来た。あの瘦せかけた青白い、ぼんやりとした男、多分連夜の恋愛妄想に頭がすっかり疲れ

切っているに違いないあの男の顔——要吉はそれを思い出すと、憫笑が頬に浮ぶのを禁じ得なかった。

「よし子さん」

こう彼はにやにやしながら云って、

「吉岡がね、あなたにそれは大変なんですぜ」

「ふん」

よし子は鼻で笑うような顔付をした。そんな邪惡な表情を彼女がしたのを見たのは初めてだった。

「可哀そうに、昨日僕のところに来て、あなたの事を云って、気の抜けたような顔をしていたぜ」

「吉岡さんて、あたし大嫌いですわ。この間、ここでお眼にかかったでしょう。あの時なんか、いやにおべっかを云って、そしてあたしの方ばかり、じろじろと、へんな眼付で見たりして……」

そう云ったかと思うと、急に笑い出して、

「あのね、あの人きつと病氣ですわ。あの日、ほら、阿母さんのお居間へちよつと呼ばれていらつしやったでしょう。あのお留守にね、あなたが中座なさって、しばらくすると、吉岡さんが急に身体中をぶるぶると顫わすんでしよう、あたし癲癇じやないかと思つて、そりや吃驚しちやつたことよ」

そして彼女は少し耳の辺を赧らめ、眼に艶を加えながら、ひどく笑った。——そのよし子の輕蔑した笑い方が、妙に要

吉には満足だったが、それを満足に思ふ自分の心が、彼は心ひそかに又恥しくもあつた。

そこに、偶然、吉岡がたずねて来た。

「失敬」そう云つて吉岡は入つて来ると、そこによし子がいちたを見て、へんに固くなりながら、挨拶した。「先日失礼しました」

「……」

よし子は黙つて、お辭儀を返しただけだった。それから俄に、

「それでは要さん、あたしこれで失礼しますわ。さようなら」

「まあ、好いでしよう」

「ええ、でも一寸用事がありますから」

「まあ、好いじゃありませんか。もつとお話なすったら……」

吉岡は狼狽しながら云った。

「……」

それには答えずに、よし子は要吉の方へ向つて、

「さようなら、又明日ね」

そして吉岡の後を通り抜けるようにして廊下に出ると、ふと振向いて、要吉の方へにっこりして、それから吉岡の背中に侮蔑し切つた眼付を向けて、よくいたずらな女の子のする、齒と齒の間から「イー」と云うあの表情をした。要吉はそれ